もうひとつの長征

――大後方への旅（九）

楠原俊代

三三

旅行団が貴州省最初の県城玉屏を出発したのは三月一八日、省都貴陽に到着したのは三月三〇日のことである。この間の旅程について、呉徴鎰と銭能欣は次のように記している。

三月一八日　〔呉〕徒歩五〇里で青渓着。青渓は貴州省〔八一県のうち〕最小の県、女子は眉目秀麗、煙害〔阿片中毒による弊害〕甚だし。〔銭〕青渓県の人口はわずかに一万七千人。

三月一九日　〔呉〕近道を通れば九〇里で鎮遠にいたる。道はぬかるんで歩きづらく、病気の学生数名は滑竿（ホワカン）

山を登る学生たち
『西南聯合大学紀念冊』９頁。

〔四川・湖南方面で用いられる乗り物の一種、竹で編んだ椅子を二本の竹竿にしばりつけ二人で担ぐ登山用の竹かご〕に乗る。渓流のほとりに桃や李、枇杷が自生しており、南天がとくに多い。楓や櫟の林もしょっちゅう見かけた。雨のなか夜七時ようやく両路口に到着、宿泊。〔銭〕青渓から鎮遠へ行くには公路と近道がある。公路をゆけば一四〇里、近道をゆけば九〇里。われわれは近道を通ったが、公路ができる前にはこの近道が唯一の官道であった。両路口で公路と近道は交わる。民家に投宿。今日の全行程は七〇里。

三月二〇日　〔呉〕充分な余力を残していたので、公路を引き返して盤山に登る。前日の雨とはうってかわって空は晴れあがり、一二キロ登って海抜九五〇メートルの頂上にいたる。盤山は三穂・鎮遠間に跨る黔東の要害の地であり、公路はぐるぐると曲がりくねって険阻をきわめる。頂上で三穂からやって来た聞〔一多〕先生らに出会い、そこで一緒に両路口までもどり、さらに二〇里歩いて鎮遠に到着。府城の県立第一女子小学校に宿泊〔聞一多や決して近道をしなかったという曽昭掄らは公路を歩いたため、呉徴鎰は盤山の頂

上で三穂からやって来た一行に出会ったものであろう〕。

三月二一日　鎮遠に滞在。〔呉〕鎮遠は山と河に挟まれ、湖南・貴州をむすぶ湘黔孔道〔孔道は街道の意〕の要衝であったためこれまでしばしば兵禍にみまわれた。清朝の咸豊・同治年間の苗族の叛乱(ママ)(1)〔一八五五～七三年、阿片戦争後、清朝の勢いが衰えた機に乗じ、貴州全域で起きた苗族史上最大の叛乱。首領の張秀眉らは、各地の漢族、少数民族、さらに太平天国軍の石達開などと連携をはかり、一八年間にわたって抵抗活動をつづけた〕の後、今日にいたるもまだ寂れたままで回復せず。学生のあるものは湧溪の大土寨まで青苗を訪ねていった。〔銭〕銭能欣ら一二人は、行政督察専員公署副官と区公所主任の案内で湧溪大土寨の青苗を訪ねた。

三月二二日　〔呉〕鎮遠から徒歩八〇里、文徳関・鎮雄関を経て施秉にいたるが、地勢は険阻をきわめる。午後、わき道にそれて諸葛洞に遊ぶ。頗る幽邃奇麗なり。

市が立っていて多くの青苗に出会う。〔銭〕施秉県城に到着すると、城内ではまだ市がひらかれていて、たいそうなにぎわいであった。折りよく、通りで一人の子供と知り合いになり、県城から西へ二里ほどいったところの涼水井にその子の苗族の同級生の村があるということで、そこまで連れていってもらった〔銭能欣は、涼水井の青苗の村で、かれらの服装や生活習慣、恋愛や結婚の風習にふれ、また同じ青苗でも前日に訪ねた湧溪と涼水井では、数詞の発音に若干の差異があることを記している〕。

三月二三日　〔銭〕朝八時施秉を出発。〔呉〕沿道の景色は単調で禿山が多く、道中ずっと歩哨が立っていた。貴陽・鎮遠間を往復する駄馬の輸送隊にも数回であう。三〇里で飛雲崖にいたる。ここには黔南第一洞天といわれる飛雲洞がある〔洞天とは道教でいう神仙の住むところ、天に通じるの意〕。

黄平は古くから苗族が入り混じって住んでいたところで、青苗のほかに仡兜（ゴトウ）〔本稿六八頁参照〕もいる。〔銭〕黄平到着は午後四時。黄平県城は山の斜面にあり、漢族と苗族が雑居している。苗族は県の全人口の六、七割を占める。

三月二四日　〔呉〕〔黄平より〕湖南・貴州をむすぶ湘黔線の最高地点、海抜千五百メートルの観音山を経て徒歩三〇里で重安にいたる。重安は大きな鎮（まち）で、重安江には鉄の吊り橋がかかっており、種々の苗族が入り混じって住んでいる。〔銭〕重安江の鉄の吊り橋は幅一丈余で木の板がしかれてあり、人や馬、ラバが通る。公路ができてからはべつに自動車のための臨時の木橋が架設され、現在建築中の石橋はまもなく完成する。

〔呉〕さらに四〇里歩くと雲渓洞（大風洞）、それから一〇里で鑪山[2]〔県城〕。県境には七種類の苗族が住み、人口の七五％を占める。夜になっても荷物は届かず、粗末な旅籠に泊まり、教師学生の別なく鉄のように冷たい布団に眠った。

三月二五日　〔呉〕苗族の部落を訪ねる。苗族の生活はいずれも自ら耕し自ら織るというもので、きわめて質素であった。村中の女たちはわれわれがやってくるのを見ると遠くへ逃げてしまった。これまで漢族の役人が苗

苗族の踊り
鑪山、苗族との交歓会で。
『西南三千五百里』

重安江の鉄の吊り橋
『西南聯合大学紀念冊』９頁。

聞一多のスケッチ、重安江

族を魚や肉のように食い物にしてどれほど苛めてきたか知られるというものだ。

三月二六日　〔呉〕〔鑪山で〕苗族との交歓会〔漢苗聯歓会〕がもたれた。急なことで仡兜族長一人が少女四人、少年七人を連れてきただけであったが、かれらは蘆笙〔竹製の管楽器〕にあわせて踊り、学生たちは歌をうたった。李〔継侗〕先生と徐〔行敏〕医官はワルツを踊り、曾〔昭掄〕先生は苗族と酒を飲みおおいに酔っぱらった。黄〔師岳〕団長も杖をもって舞を演じた。〔銭〕漢苗聯歓会は午後、県政府が旅行団のために開いたもので、夕刻までつづいて散会。鑪山県の人口は約九万、そのうち苗族は七〇％以上を占める。苗族には青苗、東苗、西苗、木老、仡兜、侗家、仲家等がある〔木老、仡兜、侗家、仲家は、戦後の民族調査を経て、苗族とは別種族と識別され、今日では、それぞれムーラオ（仫佬）族、コーラオ（仡佬）族、トン（侗）族、プイ（布依）族と呼ばれている。かつて、南方の少数民族は相当広く「ミャオ（苗）」の名称の下に包括して呼ばれていた。呉徵鎰、銭能欣の記録では、そのような当時の大雑把な呼称に従って、多種の少数民族がいずれも苗族に含まれているような記述をしている〕。

三月二七日　〔呉〕空は晴れ爽やかな気分で〔鑪山を〕出発、羊老、甘粑哨新街をへて馬場坪に到着、宿泊。今日は市日で、模様のある布で作った短いスカートをはいた苗族が多くいた。

〔銭〕甘粑哨新街では黔滇路（ママ）〔貴州省貴陽・雲南省昆明間〕、黔桂路〔貴陽・広西省柳州間〕の二つの公路が交わる〔黔滇路は湘黔路（湖南省常徳・貴州省甘粑哨間）の誤り〕。ここから貴陽まではわずか二三〇里。馬場

坪到着は午後三時、今日の全行程は七〇里。

三月二八日　〔呉〕昨夜の大雨で道はたいそうぬかるんでいた。黄絲、江西坡をへて、徒歩七〇里で貴定に到着。貴定は清水江上流に沿い、南には雲霧山がある。雲霧山は旧称苗嶺の主峰で烏江・沅江・盤江の分水嶺である。〔銭〕貴定県の人口は十万、苗族はその四割を占める。

三月二九日　〔呉〕二〇里歩いて牟珠洞にいたる。洞の入口には高さ二丈、直径二尺余の石筍があり、下から三分の一の高さのところに裂け目があった。これはかつて呉三桂がこの石筍を切り倒して雲南まで運ぼうとしたところ、神の怒りに触れ果たせなかったものと伝えられている。洞の頂上にはそのとき雷に打たれて開いたといわれる穴があった。洞の底ははなはだ深く水が白絹のように湧き出していた。

沿山堡をこえると青山洞があった。青山洞はたいそう深くて大きく、苗族の叛乱（ママ）のときに漢人はこのなかへ避難したということであるが、その半分は水が滝のように流れる水簾洞であった。〔銭〕青山洞の深さは二里ほどもあり、避難した漢人はその後五年間、洞から出てこなかった、という。

〔呉〕今日は五〇里歩いて龍里に到着。龍里県城は寂れはて、人々の多くはトウモロコシを主食にしていた。〔銭〕今日の全行程は七五里。

三月三〇日　麦はもう穂を出している。観音山を越えると、民家の多くは煉瓦造りから石造りになる。付近に

石油鉱床があったが、未開発。貴陽県境をすぎ図雲関にいたる。図雲関には模範農場があった。これまでに通過した諸県では、どこでも公路の近くに農場の看板はあっても、なかは無一物であったのにたいして、ここはずっとよくなっていた。

さらに一五里歩いて貴陽の大南門を入り、大十字路を通って、大西門外金鎖橋近くの三元宮に宿泊する。陰雨のなか隊を整え入城したが、草鞋があまりにも泥にまみれていて狼狽した。曾〔昭掄〕先生の泥だらけでぼろぼろの大褂（ダークワ）〔単衣の長い上着〕はとりわけ道行く人々の注目を引いた。

もちろんこの間も、劉兆吉の歌謡採集はつづけられた。劉兆吉は、三省にまたがる旅程のなかで湖南の晃県から昆明、さらに蒙自にいたるまでずっと苗族の同胞はいたるところで見かけ、苗族の居住する多くの城鎮村落を通過した。そればかりか黄平の皎沙村、鑪山県城では苗族との交歓会まで開かれ、何度も歌ったり踊ったりしてもらった。とちゅうの山坂や田圃の畦でも苗族の歌謡はしょっちゅう耳にした。しかし言葉が通じないため訪問採集することは容易ではなく、三千余里もの旅行中に、二千余首もの歌謡を採集しながら、苗族の歌謡はわずか二首しか採集できなかった。そのうちの一首は貴州省の黄平から重安江へむかう途中、われわれを護衛してくれた武装同志がうたっていたものである。かれは黄平の青苗であるが、漢語もしゃべれ、うたい終わると漢語で説明してくれた。道中、数首うたったが、道を急いでいたため一首しか記録できなかった。他の一首は貴州省鑪山県城区の小学校の苗族の小学生が教えてくれたものである。今回の民間歌謡採集工作において、もっとも大きな希望をいだいてのぞんだものの、その結果にもっとも失望したのは苗族の歌謡の収集工作であった[3]、という。

以上のような劉兆吉の述懐だけからみれば、当時のいわば民俗学研究ないしは言語研究の方法の拙劣さのみが印象づけられる。劉兆吉らを現地での調査者とみたとき、土地の人々との不慣れな対応の姿も目につく（本稿第三一章参照）。しかしながら、この昆明への「長征」の途次、このように歌謡の採集が企画されて、その実行者がいたこと自体、当時の中国の学問的風潮と無縁ではなかったといえるのである。劉兆吉の、北方語とは相当に懸隔のある西南地方の漢語方言を介しての聞き取りの苦労のさまや、記録する言語学的方法をもたなかったにせよ、苗語など異民族の言語に耳をかたむける姿には、若々しい学徒らしい様子がみえていて感心させられる。

以下に、当時のそのような風潮について説明し、すでにこの時期までに、訓練された研究者によって、学術的遺産として現代にまでのこる成果を生んでいることを述べて補足としたい。

一九三七年七月の日中の全面的な戦争がはじまる前には、諸科学研究のうち、民俗学研究や言語研究について見てみても、まさに中国は高潮期をむかえようとする時期にあたっていた。

中国の民俗学研究は、ヨーロッパ民俗学の影響をうけながら、五四新文化運動の高まりとともに発展してきた。一九一八年には、言語学者の劉復〔一八九一～一九三四〕らによって北京大学に全国の民間歌謡を採録するための本部、歌謡徴集処がおかれ、劉復自身も郷里の江蘇省江陰県の民間歌謡を模して作詩を始めている。一九二〇年には北京大学歌謡研究会が成立し、二二年に中国で最初の民間文学専門誌『歌謡週刊』が創刊されるなど、民間文学の研究は次第に活発になっていったのである。

劉復は、一九二〇年から二五年までヨーロッパに留学し、フランスで実験音声学の方法を学んで博士号を取得、パリから実験機器をもって帰国し、北京大学中文系の教授に就任する。すでに二四年には『四声実験録』〔群益書社〕

を著し、その後、中国各地の方言を対象とした音声学的研究を続ける一方、二九年には北京大学に音声実験室を開設するなど多方面にわたる活動をおこなっている。[4] 広州の国立中山大学に民俗学会が設立されたのは二七年のことであった。

その他に言語学の方面では、この時期、清華研究院にあって言語調査に従事していた趙元任がいる。かれは、揚子江下流域の方言調査をおこない、一九二八年には清華学校研究院叢書第四種として『現代呉語的研究』を刊行。かれの言語調査は、民間文学研究の風潮にも呼応して、ヤオ（瑶）語、現代チベット（藏）語にも及び、つづけて三〇年には、『廣西猺歌記音』〔「瑶」は、かつては「猺」と表記されていた〕（国立中央研究院歴史語言研究所単刊甲種之一）を刊行しているのである。本書においては、瑶族から提供された漢訳の歌謡を採録するにさいしても、音声記号はもちろんのこと、五線譜の上でメロディーをあらわすなど、その記述はきわめて精緻なものであり、中国語方言の好個の音韻資料となっている。また代名詞や虚辞に民族語が顔を出していて、この点も興味深い。その後、趙元任は中央研究院歴史語言研究所の言語研究部長として、全国の方言調査を企図し、三四年には安徽方言、三五年には江西方言と湖南方言、三六年には湖北方言と、つぎつぎに臨地調査に赴いている。

日中戦争勃発後は、中央研究院の各研究所も重慶、桂林、昆明他に分散して避難したことは先に述べた[5]とおりであるが、戦時下の困難のなかにあって、少なからぬ研究者が、普通では接することのできない西南少数民族との接触を通じて、かれらの神話、伝説、民間歌謡、言語、民俗などの研究に従事することで知的興味をみたしたといえるであろう。

劉兆吉はその後、採集した二千首余の歌謡のなかからあまりに俗っぽいもの、猥褻なもの、長すぎるものは削除し、

文学価値のある作品あるいはその地方の風俗民情を代表しているもの七七一首を選んで、情歌〔恋歌〕・児童歌謡・抗日歌謡・茶摘み歌・民怨・雑類に分類した。[6] これに朱自清、黄子堅、聞一多の序文、劉兆吉の「弁言」、西南采風の経過、歌謡採集地域〔玉屏、鑪山、貴陽、安順、安南、盤県、平彝〕における方言音と標準中国語との比較、総結、付録〔苗族の歌謡二首〕をくわえて、劉兆吉編『西南采風録』として一九四六年一二月商務印書館より出版している。[7]

西南とは、湘黔滇の中国西南三省をさし、風とは地方の民謡の意。

劉兆吉は計七七一首のうち情歌は六四〇首でほとんど九割を占めるというが、朱自清はその序文のなかで「劉先生の採集された歌謡には猥褻なものもあるが、一般の読者にはなじまないので、すべて削除した」と記していることから、より多くの情歌を採集していたことが知られる。本文中に採録された情歌には、例えば以下のような作品[8]がある。

高山点豆豆葉黄，　〔雲南省霑益で採集〕
人家有郎我無郎；
人家有郎同床睡，
小妹無郎抱胸膛。

高山点豆豆葉稀，
人家有妻我無妻；
人家有妻同床睡，

小郎無妻抱双膝。

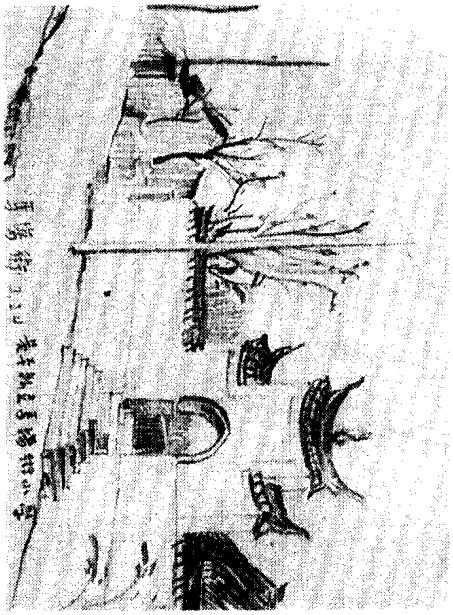
しかし情歌については、黄子堅の次のような言葉もある。(9)

これらの民謡のうち、劉君によれば九割が情歌であるという。歌詞からみればまことにその通りである。しかし、こういう言い方は容易に誤解を招く。

あるとき、私は天秤棒で綿糸を担いでいく人たちと一緒になった。かれらの担ぎ荷は百斤〔一斤は〇・五キロ〕以上あった。わたしはかれらと一日歩いたが、かれらはまるまる一日、鎮遠から施秉までずっと歌をうたっていた。かれらの歌っていたのは「郎(あなた)」や「妾(あたし)」といった類の情歌であった。また盤江の近くの荒山で鉄鍋を平彝から鎮寧まで背負っていく人たちに出会ったこともある。山道は険しく、一歩すすむたびに喘いでいたが、しかしかれらもまた喘ぎながら途切れ途切れに「妹(おまえ)」や「郎(あなた)」といった情歌をうたっていたのである。これらの人々はいちゃついていたのか。それとも恋愛を謳歌していたのか。恋をささやいていたのか。いや、肩の荷物があまりにも重すぎて、歌をうたえばその苦しみが軽くなるような気がするのである。人がうたうのを聞けば、どこまでも続いていく道中にも連れがいる、同じように苦労しているものがいると感じられる。彼らのうたう歌は、情歌というよりもむしろ労苦の叫びだといえるのである。

なお、旅行中のその他の団員について補足しておくと、道中、多くの団員が日記を書いた。曽昭掄もその日の行軍

聞一多のスケッチ

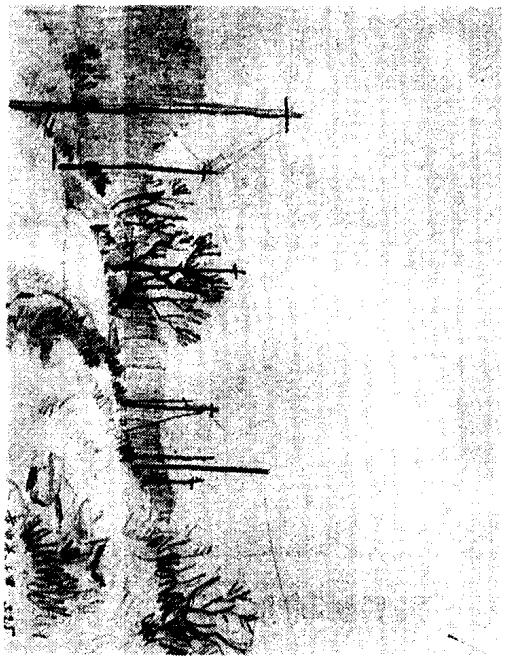


黄平県立馬場街小学校

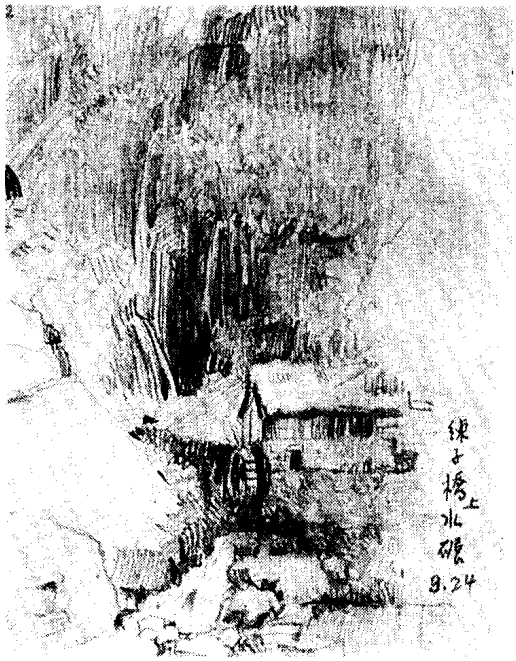
飛雲崖廟門

スケッチをする聞一多
『西南聯合大学紀念冊』11頁。

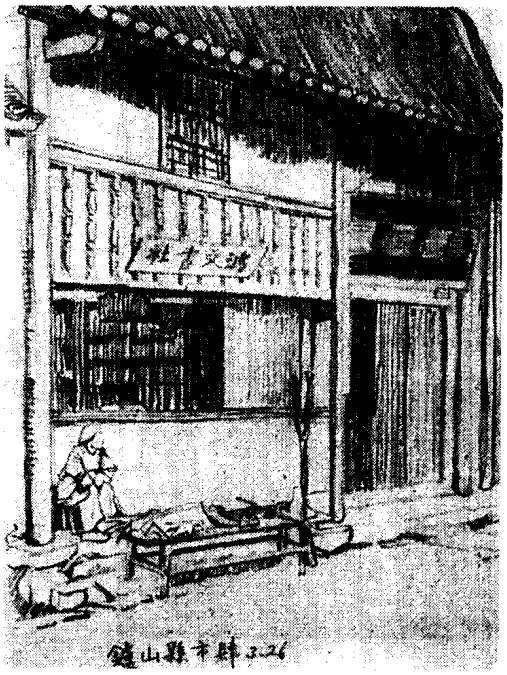
聞一多のスケッチ



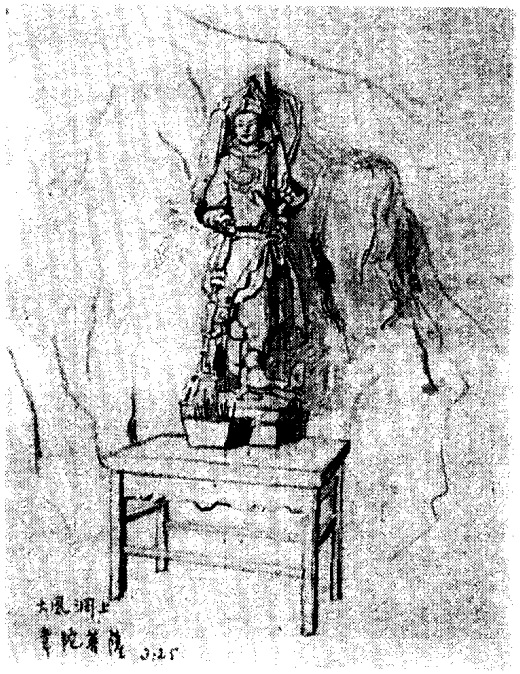
重安の10里先



重安江の水車



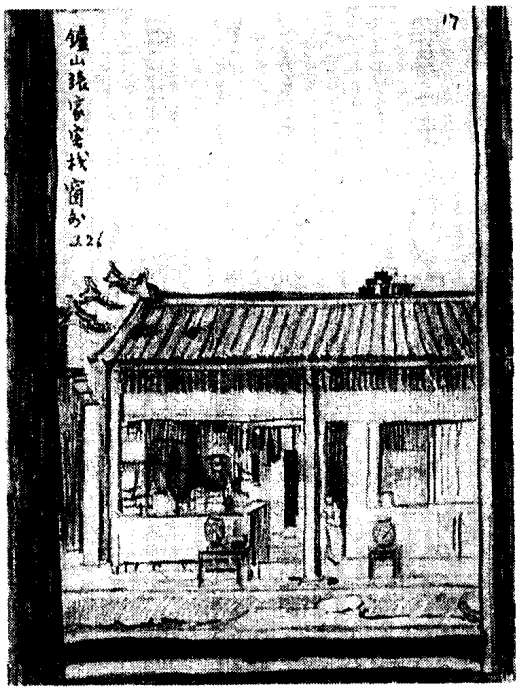
鑪山県の商店



大風洞の韋陀菩薩

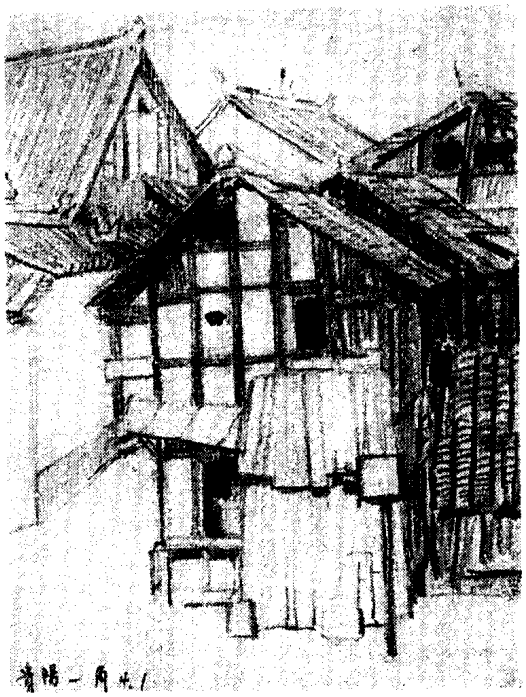
聞一多のスケッチ

石板沖



鑪山の宿の窓から

黔靈山麓



貴陽の一角

でどんなに疲れていても、布団のなかで日記を書いた。[10] 聞一多は日記は一字も書かなかったが、鉛筆をとってスケッチを始めた。この十数年来絵は描かなかったかれであるが、今回の旅行ではなんと五十数枚〔一説に、百余枚〕ものスケッチを描いた。[11] 聞黎明によれば、いま残っているスケッチのなかで、旅行中もっとも早く描かれたものは黔東の名勝、黄平県城から東二〇里のところにある飛雲崖である、[12] という。

三四

旅行団が貴州省の省都、貴陽城内に入ったのは三月三〇日。当地にまる四日滞在し、出発したのは四月四日のことであった。この間の出来事について、呉徵鎰は次のように記している。

三月三一日　甲秀楼および公園に遊ぶ。公園には貴州省の軍閥、周西成〔一八九三～一九二九〕の銅像があった。清華学校元校長の周詒春、いまの貴州省建設庁長が、夜、輔導団のために宴席を設けてくれ、茅台酒を飲んだ〔茅台酒は貴州省仁懐県茅台鎮産の名酒〕。

四月一日　夜、大夏大学の招宴。

四月二日　陰雨のなか黔霊山と麒麟洞に遊ぶ。一部の学生は東山の陽明先生祠に遊んだが、祠のなかには日本人の立てた碑があった〔陽明は、王守仁（一四七二～一五二八）の号。かつて貴州省に左遷されていたことがあった〕。

四月三日　雨のため宿舎に閉じ込められる。

この他に『南開大学校史』には、貴陽では「元南開大学経済学院理事の呉鼎昌と南開大学秘書の鄭道儒がちょうどそれぞれ貴州省政府主席と省政府秘書長の任にあり、歩行団の教師学生はかれらの歓迎と招待をうけた」[13]とあり、蔡孝敏は呉鼎昌の宴会の後「郵便局に駆けつけ、二叔と長姉が各々長沙と天津から局留めで出しておいてくれた手紙を受け取った」[14]と記している。呉鼎昌の招宴はいつ催されたのか。呉徴鎰の記す三月三一日の周詒春の招宴と同じものなのかどうかは不明である。

家族からの手紙を受けとった蔡孝敏は、まさに杜甫の「春望」の詩にうたう「烽火 三月に連なり、家書 万金に抵たる」そのもので、嬉しくて涙をこぼした、という。貴陽で久方ぶりにゆっくりと休んだ団員たちは、家族からの手紙を受けとったり、家族への手紙を書いたりしたことであろう。聞一多も父母に宛てて四月二日付で次のような手紙[15]を出している。

沅陵からの手紙はもうご覧になったことと存じます。

一七日に晃県を出発し、歩いて三〇日に貴陽に到着しました。貴州に入るとあたり一面みな山で、この半月間はかなり苦労しました。これに加えて、雨も多く、地味はやせ、旅行はいっそう困難なものとなりました。当地の諺にいう「天無三日晴、地無三尺平、人無三分銀」は、まことのことと思われます。

貴陽では知人にたいそうよく出会います。清華関係では、先の校長周寄梅先生〔本名周詒春、寄梅は字、一九一三年から一八年まで清華学校校長〕から同窓のものまで数十人を下りません。同級では、呉沢霖と聶鴻逵に出会いました。聶鴻逵は当地の人、呉沢霖は大夏大学文法学院長で、学校の移転にともないこちらに来ています。

最近知ったのですが、昆明では校舎が足りず文・法の二学院は蒙自に設置されることに決まりました。昆明に新しい校舎が完成すれば、文・法の二学院も蒙自から昆明に移るものと推測されますが。蒙自は昆明から鉄道で一日の距離で、安南の近くにあります。この度の旅行はもともと辺鄙な遠隔の地をめざしていたのですが、いまはさらにますます遠くへと行くことになりました。

近ごろ前線から戦勝の知らせがひきもきらずに伝わり、ことのほか喜び安堵していますが、しかし武漢ではそのために敵機の爆撃がいっそう頻繁になりました。……田舎は常と変わらず平穏無事だと存じますが、家族の安否がわかりません。……

聞一多は、「呉沢霖は大夏大学文法学院長」と記しているが、貴陽の大夏大学[16]には文・理・教・法商学院が設置されており、文法学院はない。このとき呉沢霖は教務長、社会学教授、その後、西南聯大社会学系教授となっている。大夏大学は一九二四年上海に設立された私立大学である。一九三七年八月一三日、上海で日中両軍の軍事衝突〔淞

滬戦役〕が始まると、大夏大学は内遷を決定。初めは上海にあった大夏、復旦、光華、大同の四大学を合同して聯合大学を設立する話があったのだが、意見の一致を見ず、光華、大同大学を含めずに復旦大夏聯合大学を江西省廬山の牯嶺に組織。牯嶺ではわずか三カ月間授業をしただけで、三八年初めに長江を遡り四川省重慶の北碚に再度移転する。しかし校舎が足りず、経費や人事面でも問題が生じ、聯合大学を解消。復旦大学は北碚に留まり、大夏大学は理事長の何応欣、校長の王伯群がともに貴州省出身であったことから貴陽に移転することが決定。三八年秋から正式に授業が開始された。

錢能欣も、

貴陽には、洋品店、百貨店、雑貨屋が多いが、品物は他の土地よりも三、四倍も高価である。これは主に交通が不便で商品の運搬が困難なことによるものであるが、商人が故意に物価を引き上げているせいでもある。抗戦が始まって以来、戦区から避難してきた他郷の人々の数が増え、最近の統計では、市の全人口は二二、七六九戸、一二七、二三〇人、その内、男子は六九、二九七人、女子は五七、九三三人である。貴陽市もまたこのために繁栄していた。

と記しているように、貴陽にも多くの人々が避難してきていた。そんなわけで、聞一多も知人とよく出会ったのである。湘黔滇旅行団の輔導団の教師一一名に限っていえば、周詒春と大夏大学、それに呉鼎昌の三つの招宴がもたれたことになるのであろうか。「天に三日の晴れまなく、地に三尺の平らなるなく、人に三分の銀なし」といわれる貴州

の地で、思いもかけず出会ったかれらは旧交を暖めたのだったが、旅行団の文・法の二学院の教師学生は、いまや昆明が目的地なのではなく、さらに昆明から鉄道で一日の距離にある、ベトナムの近くの蒙自にまでむかわなければならないことを知ったのであった。

大夏大学もまた、このまま貴陽にいられたわけではなかった。戦火はさらに拡大し、日本軍は衡陽を下し、桂林を攻め、柳州に迫り、一九四四年秋には貴州も臨戦状態となったのである。同年一一月、日本軍は貴州南部の荔波、三都、丹寨等の県から独山にまで侵入し、貴陽にも危険が迫ったため、一一月末政府は貴陽の各機関学校に緊急強制疎開令を出すにいたる。大夏大学も貴州省西北境の小さな街、赤水に疎開することを決定し、四五年春から赤水県の孔子廟で授業を再開、抗戦勝利後の四六年夏ようやく上海に復帰したのだった。なお一九五一年には上海の大夏大学の敷地に大夏大学と光華大学を基礎に華東師範大学が設立され、いまの中国に大夏大学はない。

三五

貴陽を出発したのは四月四日のことである。銭能欣は、貴陽に滞在しているあいだじゅう長雨が降りつづき、四日になってもまだやまず、この日の朝、旅行団は雨のなかを出発したのだ、という。

呉徴鎰の「長征日記」を見てみよう。

四月四日　雨のなか貴陽をはなれる。道はことのほか平坦。谷と山が交錯し、山々のいただきはことごとく尖り、風景は〔広西省の〕桂林・陽朔間に似ている。これ以後、多くは石灰岩地帯のKarst地形となる。清鎮南郊の中山公園には高大な「剿匪〔匪賊を討伐するの意、蔣介石の紅軍討伐をさす〕」戦没将兵記念碑が建っていた。十年の内戦の結果が白骨の山なのであった。

銭能欣は、中山公園の高大な記念塔には「陸軍第四軍五十九師剿匪陣亡将士紀念塔」と刻まれてあった、と記す。銭能欣によれば、一九三五年の国民党中央軍の紅軍追撃コースと旅行団がこの日歩いた公路とはさほど違ってはいなかったし、紅軍は清鎮から六〇里のところを通過している。紅軍は清鎮県内には二日とどまっただけで、早々に猫跳河を渡っていった。猫跳河の水の流れが急で渡るのが容易ではなかったことと、中央軍に追いつかれないためであったが、おかげで清鎮の損害は大したことはなかった。旅行団は城内の県立中心小学校に宿泊。今日の全行程は五六里、という。

聞黎明は、「貴陽を経てから聞一多は中国工農紅軍の長征時の痕跡にふれ始める。田舎の道端の家の壁にかすかに見える紅軍の標語のなかには、人民に抗日に立ち上がるよう呼びかけたものもあった。それは聞一多の中国共産党の抗日の主張にたいする理解を深めた」と書いているが[17]、この旅行団に参加していた中文系の学生、陳登億は、その回想文のなかに次のように記している[18]。

われわれの行程は、多くの地方が紅軍の長征で通過した地方であった。紅軍の長征では、一九三五年初めにこ

れらの地方を通過していて、このときからわずか三年しか経っておらず、道中、紅軍の布告や標語がまだはっきりと見えた。

道中の人民には、われわれのような学生は新奇なものに感じられ、警戒心を持たれもした。しかし、われわれが言葉使いも穏やかで、買い物をするにも公正であり、とりわけ食事のときには余分になった食べ物を近くの貧しい人々に分け与えたため、われわれに近づき本音をはくようになったのである。われわれはとくに喜んでかれらが紅軍の長征の物語をしてくれるのを聞いた。かれらは、紅軍は規律が厳格公正で、将兵は平等、人夫狩りや壮丁を拉致することもなく、いささかも人民の利益を損なうことなく、多くの青年たちが自主的に参軍していったこと、また紅軍がどのようにして貧民のために食糧を放出してくれたか、人民を助けて労働したか等等について語ってくれた。……

われわれの一部はすでにスノーの『西行漫記』を読んでおり、紅軍と毛主席等指導者の状況についても理解していたし、共産党は殺人放火をやる、共産共妻といった国民党の宣伝を信じるものはいくらもいなかったが、今かれら自身の経験として話を聞けば、いっそう身近に感じられたのである。聞一多先生もわれわれと同じようにこれらの話を喜んで聞かれ、休憩のときには農民たちと世間話をしながら、紅軍の長征のときの話を聞いておられるのをしょっちゅう見かけた。

劉烜も『聞一多評伝』のなかで、この陳登億の回想を、『西行漫記』にはふれず、「われわれの行程」を「学生たちが貴州で通った経路」に、紅軍の標語を「かすかに見える」、紅軍の長征の物語を聞一多も「喜んで聞いた」から

「興味をもった」に改めて、ほぼそのまま用いている。[19]

『西行漫記』とは、Edgar P. Snow〔一九〇五～七二〕の *Red Star Over China* の中国語訳である。日本語訳は『中国の赤い星』。本書は、スノーが一九三六年六月から一〇月までにわたって外国人記者として初めて中国西北の革命根拠地（後の延安を中心とする陝甘寧辺区）におもむき取材した中国の共産主義勢力についてのルポルタージュである。一九三七年一〇月、ロンドンの Victor Gollancz から初版が出版され、一一月には五版まで刊行された。『西行漫記』は、このときちょうど上海にいたスノーの同意をえて、上海租界内に漂泊していた一群の抗日救国人士が一部の中国共産党地下党員の指導下に組織され、「復社」の名で *Red Star Over China* を集団で翻訳、印刷、出版、発行したものである。一九三八年上海復社版のスノーの「中訳本作者序」にも、「私の理解では、復社とは読者自らが組織した、非営利性の出版機関である」と記されている。出版されたのは一九三八年二月であったというが、当時、上海の租界当局は日中戦争にたいして中立を宣言していたし、国民党統治区においては報道管制がしかれており、『紅星照耀中国』という原書名では出版は不可能であったため、『西行漫記』に改められた。*Red Star Over China* は中国の革命勢力の実体を海外に紹介したばかりではなく、その中国語訳『西行漫記』は、中国の知識人の多くにとって初めて知る「紅色区域」であり、大きな反響をよび、その後学生など知識青年の延安入りを促すのに一役果たした、といわれている。[20]

聞一多の弟、聞家駟も「わたしが初めて読んだ中国革命を紹介した書物は、スノーの書いた『西行漫記』であり、この本は兄の一多がくれたもので、読み終わると兄の言葉にしたがって他の友人にまわした」[21]と記していることから、聞一多自身も後に『西行漫記』を読み、大きな感銘をうけたようである。

しかし、聞一多は「八年的回憶與感想」のなかで以下のように、日中戦争初期における蔣介石にたいするほとんど限りないまでの崇拝と信任、およびこのときに『西行漫記』を読んではいなかったことを、はっきりと述べているのである。[22]

中国社会にたいする抗戦の影響は、当時はまださほど顕著ではなく、人々の蔣主席にたいする崇拝と信任はほとんど限りないものであった。スノーの『西行漫記』のような本は読んでおらず、みなは抗戦するにもどのようにして立ち上がればよいのかわからず、ただ、ひとりの勇敢で剛毅な指導者に従うまでのことで、このような指導者にたいしては尊崇あるのみ、と思っていただけであった。……

当時は、国をあげて抗戦の緊張のなかにあり、どんなに辺鄙な片田舎の住民も日本を打たねばならないことを知っていたため、〔湘黔滇旅行団は〕道中なんの宣伝をする必要もなかった。人民に近づくのはしょっちゅうのことであった。しかし、多数のものたちの注意をひいたのはやはり苗族の風俗習慣、服装、言語や名勝古跡等等であった。

旅行中、学生たちはみな、上には英明な領袖〔蔣介石〕がおり、その下で五百万の勇猛果敢な兵士が抗戦している、[23]問題はない、と思っているようであった。われわれは、昆明に着いたらみなが安心して勉強できる環境であることだけを希望していた。みなはあまり議論もせず、政治問題すらさほど考えなかったようである。輔導団団長と食事と宿舎のことで衝突したことはあったが、これも小さな出来事で、すべては楽しかった。

さらに、一九三八年上海復社版『西行漫記』のスノーの「中訳本作者序」末尾には一九三八年一月二四日の日付がついており、同年二月に上海で出版されたとしても、湘黔滇旅行団が雲南にむけて出発した二月一九日までに湖南の長沙で本書を読むことができたかどうか。ほとんどのものは、『西行漫記』が出版されたことを知らなかったのではないだろうか。ただし、本書は中国共産党地下党員の指導のもとに翻訳されたということであり、長沙臨大にも学生共産党員一〇余名〔一説に二〇余名〕からなる党支部が結成されていた[24]ことから、かれらなら、あるいは『西行漫記』のことをすでに知っていて、先にあげた陳登億の回想や史靖が次に記すとおり、

> 行程が西にむかって進んでゆくにつれて、『西行漫記』を読んでいたものたちは、だんだんと足もとの道がすでにあまたの血腥い遺跡なのだとさとった。それがまた多くのものたちの注意をひき、とても信じられないようなほとんど伝奇小説風のレポートが、一つ一つ自らの面前で実証され、自らの体験のなかで証明されていった。かれらは少なからぬ〔紅軍の〕物語を聞き、道中、星の数ほどあるトーチカを目にした[25]。

ということも、あり得ることであっただろう。

そしてまた、道中においては、紅軍の標語が見られたばかりではなかった。劉兆吉は、次のように書いている[26]。

> 一九三八年四月六日、われわれが貴州省安順へむかう途中、石壁に「打倒共産党」、「粛正共産党」等の反動的な標語の痕跡を見つけた。聞けば、これはわれわれの二万五千里の長征部隊が通過していった後で、国民党反動

派の追撃部隊政治部がやったものだということであった。聞一多先生はこれを見ると、憤慨して「蔣介石が国家と国民に災厄をもたらしたことの動かぬ証拠だ」といい、そのまま説明もせずに行ってしまわれた。先生が不機嫌だったので、わたしもそれ以上話しはしなかった。

今わたしは、この言葉の深い意味がようやくにしてわかったのである。この言葉の故に、聞一多先生のことを一九四二年以前においては、まだ政治のまったくわからぬ書斎学者だというものもあるが、それは誤りだと思われるのである。

『聞一多研究資料』所収の「聞一多年譜」にも、「道中で目にした西南人民の生活の悲惨さに〔聞一多〕先生は深く同情し、憤慨して『蔣介石は中国をどこまで踏みつけにして駄目にしたことか』といった」[27]とある。

それならば、先にあげた聞一多の回想に記す、蔣介石にたいするほとんど限りないまでの崇拝と信任は、どうとらえればよいのか。まさにこの故に、聞一多批判がでてくるのであるが、史靖は先の引用部分につづけて以下のように記している。[28]

雲南、貴州に入ると、とても人間の住む所とは思えないほどのひどさであった。着る服もない一七、八の娘や、塩や石炭を背負う苦力の姿は、聞一多先生の心にきわめて深い印象をあたえ、かれは同情し、憐憫の情をいだいた。しかし、かれはまだこれらの貧しい同胞を救うことを理解してもいなかったし、かれらを救うための援助もしなかった。

三六

旅行団が四月五日に清鎮を出発してから、一〇日に永寧に到着するまでの間について、呉徴鎰と銭能欣は次のように記録している。

四月五日　〔呉〕徒歩三〇里で四成橋を通過、このあたりは尋常ではないほどに荒れはて、川の瀬音と鳥のさえずりばかりが耳を楽しませてくれた。道の左手には屏風のように切り立った山々が遠くにまで連なっていた。さらに三つ四つの鍾乳洞に遊び、徒歩二〇里で平壩に到着。今日は市が立っていて多くの苗族を見かける。苗族には青苗、黒苗があり、頭を包む布に違いがある。

〔銭〕平壩県城に到着したのは午後四時。今日の全行程は五六里。平壩県の人口は十万八千人、そのうち苗夷（ママ）は四割を占める。

四月六日　〔呉〕平壩を出発し、西南にむかって徒歩三〇余里行くと、右側には印判のような形をした天台山があった。その山の懸崖絶壁に五龍寺があり、寺のなかには呉三桂の腰刀と朝笏各一があった〔銭能欣は、天台山と五龍寺を五台山、興龍寺と記す〕。

また二〇余里進むと、孟獲が食糧を貯蔵したと伝えられる糧倉洞があった〔孟獲は諸葛亮の南征のさい、七度捕らえられ、七度放たれ、ついに帰順した〕。洞内は広くて深く、人が住んでいた。

盛装する安順県のプイ族女性　　平壩県の市

『西南三千五百里』

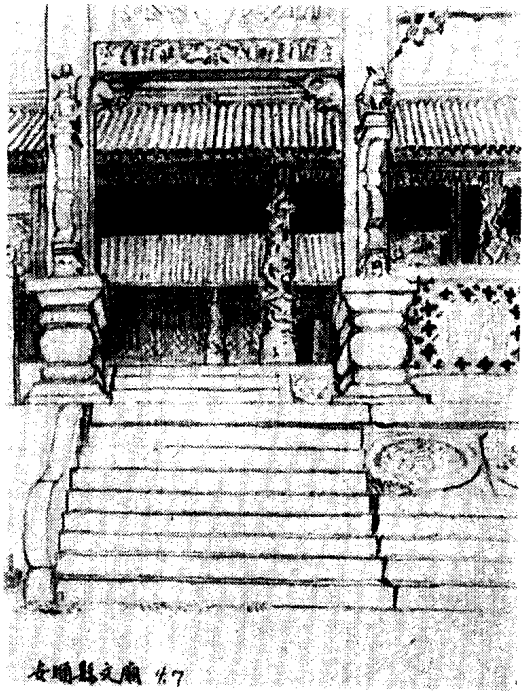
旅行団の教師『西南聯合大学紀念冊』17頁。

聞一多のスケッチ

安順県華厳洞小学校

清鎮県東山寺

鎮寧双明洞



安順県文廟

さらに一五里歩いて安順に到着。安順は貴州省西部の要衝で、鼓楼を中心に東西南北に大通りが走っていて、市場も賑やかで清潔であった。七、八種類の苗夷[29]がおり、県の全人口二〇余万人のうち四分の一を占め、文化もわりあいに発達していた。

〔銭〕安順県城に到着したのは午後四時頃。今日の全行程は八五里。晩には用事がなかったので、いつものように茶館へ行った。

聞くところによれば、以前の安順は山野一面が罌粟の花で、このため毎年多額の収入があり、市場も繁栄していたが、現在では阿片の禁止を励行しており、経済への影響は免れないだろう、ということであった。

安順城内には農民銀行があり、これは安順唯一の金融機関であった。文化の方面では、省立図書館、省立初級中学校、県立女子中学校、私立女子中学校と、全県に十余の小学校と二十余の短期小学校があり、教育はまだ発達しているといえ、貴州各県のなかでその右にでるものはない。

四月七日　安順に滞在。〔呉〕今日は〔安順〕南郊の華厳洞に遊ぶ。華厳洞ははなはだ広大であった。

四月八日　〔銭〕朝八時半に安順を出発。

〔呉〕平坦な道を六二里歩いて鎮寧に到着。畑には罌粟の花がもう咲いていた。鎮寧城東門から二里余り行くと火牛洞〔現在は犀牛洞に改称〕があった。……われわれ十余人が一番乗りをしてもどると大いに宣伝したので、旅行団の全員が、炊事夫までもが火牛洞に出かけていった。なかには、二度三度、あるいは翌朝の出発前にも遊

びに出かけていくものまであった。

〔銭〕今日の全行程は六二里。

鎮寧県の全面積は二、五三三平方キロで、そのうち山岳地帯は七割、耕地面積はわずか三割。人口は九万七千六百人で、漢民族はわずか三〇％を占めるのみである。

四月九日　〔呉〕鎮寧を出発、安荘坡をすぎると桐の花が満開で、また谷間に罌粟畑を見かけるのはしょっちゅうのことだった。白水街には白水河大瀑布があり、高さ約二〇メートル、幅約三〇メートルで万馬奔騰するがごとき勢いであった。これより約六里下ると黄菓樹瀑布があり、高さ七五メートルの絶壁を水は幅約二〇余メートルにわったって轟音を発し数丈もの飛沫をあげながら流れ落ちていた。

これよりあと山道を登って鶏公背にいたり、そしてまた山道を下りて登ると大坡頂にいたる。〔銭〕大坡頂から二里下り、公路の左手の小道を三、四里登ると紅岩にいたる。紅岩碑があり、殷の高宗が鬼方を征伐したさい、その功績を刻んだものと伝えられ、また当地の人々は諸葛碑とも呼び、諸葛亮が蛮族を平定したときに立てたものともいう。

〔呉〕紅岩碑から七里〔銭能欣は一〇里と記す〕下ると灞陵橋（ママ）で、橋の上では多くの苗族の女たちが露店をだして甘署を売っており、旅行団の一行はここで渇をいやした。坂道を登っていくと、市から戻ってきた苗族の少女に出会った。この少女は白地に藍色の模様のついた引きずるように長いスカートをはき、頭の上にお下げを巻き付け、その下をスカーフでくるみ、すこぶる趣があった。

〔銭〕壩陵橋から関嶺場に行くには公路と山道の二つのコースがある。前者は一八里多く歩かなければならず、後者なら関索嶺を越えなければならない。われわれは山道をとって、関嶺場に到着。今日の全行程は九〇里。

〔呉〕大覚寺に宿泊。宵には月が出ていたが、夜間大雨が降った。

四月一〇日　〔呉〕四、五里歩いて観音洞にいたる。その左側にはもう一つ洞があり、どちらにも入った。その後、道に迷い、山査子の林の中を進んで行くと、髑髏を一つ見かけた。陰雨の降りしきるなか、たいそう不気味であった。

今日は五〇里歩いたが、人家を見かけることもなく、ぐるぐると曲がりくねった公路を登って、晩には永寧に宿泊。そこで貴陽八日付の新聞を見て台児荘の大勝利を知った。

ここで、呉徴鎰と銭能欣の記録に補足しておくと、四月六日から八日まで滞在した安順について、蔡孝敏は次のように記している。[30]

安順県はわりあいに大きく、通りも清潔で、住人は家の表門に春聯を貼っていた。次の二つは今でも覚えている。

窗虚諸葛亮　　窓は虚しくして諸葛亮るし
室小常遇春　　室は小なれども常に春に遇う

これには古人の姓名、諸葛亮〔一八一～二三四〕と常遇春〔一三三〇～一三六九〕がはめ込まれてあって愉快だった。また、

完成西南鉄路線　西南に鉄路線を完成し
収復東北土地権　東北に土地権を収復す

というのもあったが、その家の主人の愛国心と愛郷心が余すところなく表れていた。

関索嶺については、銭能欣が、勾配が急で登るのが困難であったと記すのみであるが、明治三五年一一月にこの山を踏破した鳥居龍蔵は次のように記している[31]――この山〔関索嶺〕に登る路は絶壁の間にわずかに足を容れるだけの小径があるのみで、一歩踏みはずせば谷底に身を粉砕しなければならぬ危険な登山であった。ともかくも登りつめて一息つき、絶壁の上から今よじ登ったところを見下ろすと、壁立千仞の直下には北盤江の水が雪を噴いて南方に奔馳しているのが見える。ほとんど目が廻るほどの危険な位置にいることを感じた。それからなお上ること一千尺余にして、いよいよ関索嶺の絶頂に達した。山上は一大平原であって、その間に村落がある。

かくまでに苛酷な旅程をこなしつつも、旅行団の一行にとって火牛洞と黄菓樹瀑布はとくに印象にのこった景勝の地であったようである。

火牛洞については、呉徴鎰も四月八日に旅行団の全員が出かけて行ったことを記していたが、浦薛鳳によれば、聞一多も「火牛洞が絶景で、洞の入り口はやっと身を入れられるだけなのに、中は数百人も入れるほど広い。石筍は上下につながり、そのありさまは薄暗く不気味で神秘的かつ美しい」と語った、という[32]。浦薛鳳は、五月初旬に昆明か

ら蒙自にやってきた聞一多が長沙から昆明までの徒歩旅行について詳しく話してくれ、たいそう面白かった、と記している。

また黄菓樹瀑布については、蔡孝敏が次のように記している[33]——鎮寧県の黄菓樹大瀑布は、天の渡し場をひっくりかえしたような形状、万馬奔騰するがごとき勢いで、耳を聾さんばかりのゴーゴーたる水音がとどろき、その偉容を前に立ち去りがたい思いがした。こうした天然資源を電力として利用する計画を政府は早くからもっていたが、戦争でいまだ果たせずにいた。

三七

四月一一日に旅行団は永寧を出発。この日は飢えと寒さと疲れが極点にまで達して、とうとう学生たちのあいだで腕力沙汰まで起こりかねないという事態が生じた。先にあげた「八年的回憶與感想」のなかで聞一多は、学生たちが輔導団団長と食事と宿舎のことで衝突したことがあった、と述べていたが[34]、それはこの日のことである。

呉徴鎰は、次のように記している——曇りで、雨は降っていないが、道は滑ってたいそう歩きづらい。荒れはてた山の斜面に草は人の背丈ほどにも伸びている。どんどんと山道を下り、一二時に盤江に到着。

銭能欣によれば、盤江の鉄の吊り橋は康熙三年〔一六六四年〕に落成。一九三六年には黔滇路が開通し、車両もこの橋を通過するようになって、その重みにたえかね、この年の三月つまり旅行団がやってくるつい前の月に、鉄索が

とつぜん切れてしまった。聞くところによれば、このとき車が一台盤江に転落し、旅客四〇名〔呉徴鎰は四〇余名と記す〕中、助けられたのはわずかに二二名という事故があった、という。

そんなわけで小舟で盤江を渡るより他なかったのであるが、呉徴鎰はこの後の経緯について次のように詳しく記している。

小舟は狭くて五、六人しか乗れず、先は尖り後ろは切断されたような形であった。櫂は長い柄のシャベルのような形で、二人が前と後ろでこれを漕いだ。乗客は一列になってしゃがみこみ、両手でしっかりと舟べりをもち、立ち上がったりむやみに動いてはならないのであった〔一本に、船を漕いだのは彝族同胞、と記す[35]〕。

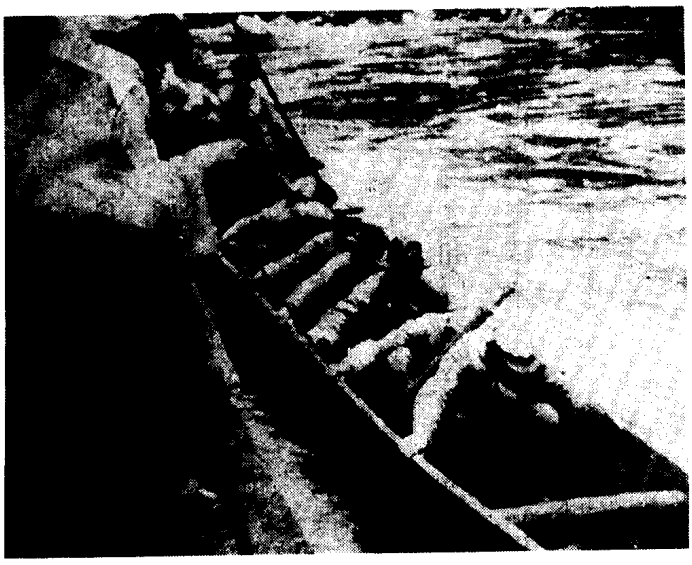
舟ははじめ岸に沿ってゆっくりと遡っていったが、橋のそばまでいくと急にくるりと向きを変え、流れのままに飛ぶ鳥のような勢いで下っていった。そして岸に近づくとまた舟を漕いで河を遡っていく。ちょうど河の中ほどのところがもっとも危険でスリルもあって面白いのだが、臆病なものは顔もあげられないでいた。

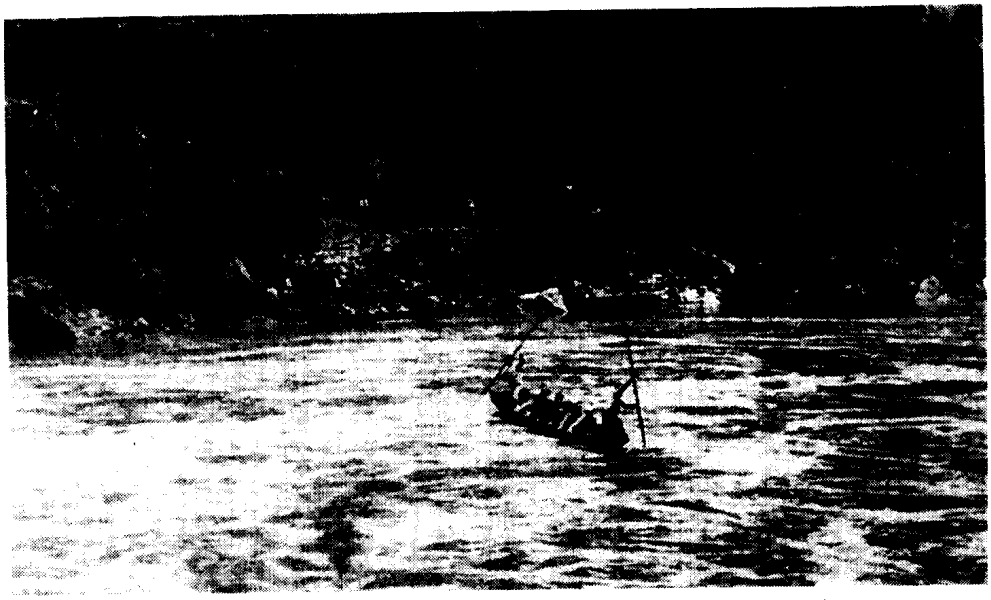
それから二五里歩いて哈馬荘に到着。本来はここに宿泊する予定であったが、山頂の小さな村で湯茶食事の手配もできず、もう夕方の五時になっていたのであるが、急遽、ここからさらに一八里さきの安南〔今の晴隆〕に宿泊することになった。

安南は小さな町で、さきに着いた学生たちが我がちにとばかり行商人から炒米糖（チャオミータン）〔おこし〕や湯を買い求め、あっという間に売り切れてしまったため、あとから着いた学生たちは空腹のまま横になるより他なかった。夜になっても布団や炊事道具の多くは盤江の東岸に留め置かれたままで、学生たちは大群の難民のように飢えと寒さ

食事の支度

盤江を渡る





上右：『西南聯合大学紀念冊』12頁。　中：『聞一多書信選集』
上左：『清華校友通訊』新77期。　下：『西南聯合大学紀念冊』9頁。

に苛まれ疲れはて（今日の全行程は九五里）、県政府大堂で座ったまま一夜をすごごした。

銭能欣によって補足すると、盤江を渡ってから哈馬荘までもやはり公路ではなく近道を歩いた。哈馬荘には二、三〇戸の人家しかなく、多人数の旅行団の食事の用意はできなかった。安南に着いたときにはもう日が暮れてしまっており、城内にあった数軒の小さな商店も閉まっていた、ということである。

盤江の吊り橋が壊れていて、それまではトラックに積んでいた荷物もすべて小舟で運ばなければならなくなったのである。五、六人ずつ小舟に乗って、旅行団の全員が盤江を渡ったのであるから、それだけでもたいへんな時間を要したことであろう。盤江の渡し舟はあまりに小さく、この日のうちに布団や炊事道具まではとても運べなかったのであろう。そのうえ当初の宿泊予定地からさらに一八里も余計に歩き、あわせて九五里も歩いてやっとのことで安南まで辿り着いても、食事さえとれず夜具もない。

騒ぎが起きたのは、このときのことであった。銭能欣は、県政府大堂で座ったまま一夜をすごしたことしか記していないが、呉徴鎰は先にあげた引用部分につづけて以下のようにかなり詳しく記している――曾、李、聞先生も学生たちと一緒に座り、二人の黄団長〔黄子堅教授と黄師岳中将〕にかわって罵られた。夜半、だれかが黄子堅先生の甥と口喧嘩を始め、すんでのところで腕力沙汰にまでなりかけ、県知事が着物を羽織って起きてきて喧嘩の仲裁をするという一幕もあった。

長沙臨大湘黔滇旅行団は、これまでに見てきたことからも知られるように、政府の手厚い保護のもとに旅行をつづけてきており、食事もとれず泊まるところもないというようなことは、二カ月余の旅行中この日のみで、いわば例外

的な出来事であった。この騒ぎについては、とくに聞一多関係の諸本に記されているのだが、その記述は少しずつ異なっている。

例えば、『聞一多全集』所収の「年譜」一九三八年四月一一日には、以下のように記されている。[36]

〔旅行団が〕安南に着いたとき、日はすでに暮れてしまっていた。安南は小さな県で、二百余人の食事と宿舎の問題を解決するすべがなく、そこで学生たちは県政府大堂へ駆けつけたのだが、学校責任者の黄子堅先生と口論になってしまった。というのは、その晩、県長が旅行団の諸先生を食事に招待していたからである。聞先生もこのときそこにおり、学生たちが飢えた人々さながらに「暴動」でも起こしかねないのを見て、人込みのなかで「わたしは今年もう四〇歳だ。だが、わたしはきみたちと同じだ……もしもだれかが故意にこんなことをしているのなら……それでも生きてゆけるのか〔なんと恥知らずな〕」と話した。

学生たちはただちに静まり、ひとりが賛嘆して「文学の……」といいかけたが最後まではいわず、その後口を開くものはだれもいなくなってしまった。この夜は、先生等もみな食事もとらず眠りもせずに、学生たちと一緒に県政府大堂で寒いなか座ったまますごした。

その他に許芥昱は、食べるものも泊まるところもないので教員たちを捜したところ、県長から歓迎会に招待されていることを知った。立腹した学生たちは、県政府で座り込みを始めた。聞一多はこの騒ぎを聞きつけ食堂から出てきて、学生たちに先の「年譜」に記されているような話をしたのだ、と記す。[37]

また、王康は、この騒ぎで県長は旅行団の教授らを招待するつもりであったが、やむなく中止した、とする。[38] 騒ぎが起こったとき、県長主催の招宴はまだ始まっていなかったのだろうか。季鎮淮は、「かれ〔聞一多〕はほんのわずかの詩人の言葉で、たちどころに学生たちを静まらせた」という。[39]

聞一多が「わたしは今年もう四〇歳だ」といったのは数え年で、満年齢では三八歳であった。それでも当時の聞一多は、劉兆吉によれば「痩せて顔色も悪く、額には深い皺が刻まれ、ぼさぼさの髪でたいそう老けて見えた。みなはかれが五〇歳以上だと思っていた」[40]ということであったし、蔡孝敏も「聞一多教授が五四運動で活躍されたということは、みなが知っていた。聞教授が知命〔五〇歳〕をすぎてなお歩行に参加されたことについて、団員はことのほか敬服していた」[41]と述べている。

呉徴鎰によれば、この夜、学生たちとともに県政府大堂で座ったまま朝を迎えた教授は曾昭掄、李継侗と聞一多であった。五〇歳をこえているとしか見えないような「老教授」をも含めて、三名もの教授が学生たちと一緒に座ったことに、学生たちはなによりも感動し、連帯感をもったのではなかっただろうか。険阻な山道を一昨日は九〇里、この日は九五里も歩き、連日の疲労は極点にまで達していた。にもかかわらず食事もとれずに、布団もない県政府大堂で座ったまま夜を明かした。そのときかれらの胸中にあったものは、日本の侵攻にたいする憤り以外のなにものでもなかっただろう。

注

(1)『抗戦中的西南聯合大学』所収の呉徴鎰「長征日記」原文には「咸同苗乱」とあるが、いまの中国では咸豊・同治年間の「苗族の叛乱」ではなく、「苗族起義〔蜂起〕」とされているため、『清華大学史料選編』第三巻（下）所収の同文には呉徴鎰の原文の苗乱に括弧が付されている。

(2) 呉徴鎰、銭能欣ともに、黄平・重安間（観音山経由）は三〇里、重安・雲溪洞間は四〇里、雲溪洞・鑪山間は一〇里と記しているが、東亜同文会編纂『支那省別全誌　第十六巻　貴州省』（東亜同文会、大正九年）二五一頁には、黄平・清平（鑪山）間は「撫水と重安江との分水嶺を越ゆるを以て、高低屈曲多く歩行困難にして貨物の運搬は挑夫に依る、此間里程は郵便図に依れば七十五支里と称すれ共、是小里にして吾人の実測に據るに次の如し」として、

黄平・重安江間	二七・六支里
黄平・観音山間	三八・五支里
黄平・雲溪洞間	四六・六支里
黄平・清平間	五七・三支里

という。

また、〔三月二六日に〕鑪山で苗族との交歓会が開かれたことは、呉徴鎰、銭能欣の記録から確かであるが、三月二四日に黄平を出発した後、〔二六日の〕鑪山における交歓会まで、どこからどこまで歩いたのか、どこで宿泊したのか、不明。銭能欣の記録には施秉を出発した三月二三日と鑪山を出発した三月二七日の日付しかなく、鑪山県城に到着した日に「今日の全行程は四〇里」と記している。聞一多のスケッチ〔本稿、注（8）参照〕の日付によれば、重安江は三月二四日、重安の先一〇里と雲溪洞は三月二五日とある。このことから、黄平・鑪山間は呉徴鎰、銭能欣の記録により八〇里であったとして、三月二四日の行程も四〇里で、黄平から重安を経てその先へ一〇里歩いたところで宿泊し、三月二五日に雲溪洞を経て鑪山に到着、宿泊したのかもしれない。

(3) 劉兆吉編『西南采風録』、「付録・苗歌」一九二、一九三頁。

(4) 《中国語言学家》編写組『中国現代語言学家』(河北人民出版社、一九八一年)第一分冊八六〜九二頁。

(5) 本稿第二〇章四一頁参照。

(6) 劉兆吉編、前掲書、「総結」一九一頁。「総結」には、本書に採録した歌謡計七七一首のうち、情歌・六四〇首、童謡・三五首、抗戦歌謡・二〇首、民怨・一三首、茶摘み歌・四首、雑類・五九首と記す。但し、「総結」にいう童謡と抗戦歌謡は本文中および目次では児童歌謡、抗日歌謡と記す。

(7) 劉兆吉編、前掲書が出版されたのは一九四六年一二月であるが、朱自清、黄子堅、聞一多の序文に付された日付は一九三九年の四月と三月で、本書の編纂はこのころには終わっていたものと考えられる。また目次の「西南采風の経過」は本文中には「西南采風録」と記す。

(8) 劉兆吉編、前掲書、九〇、九一頁。以下は、本文中に引用した情歌の猥褻なニュアンスをいかしたひとつの意訳の試みである。

高山点豆豆葉黄，　どてのおさねをちょちょんのちょん　ぼぼはうれごろ　まめのはもきいろ
人家有郎我無郎；　よそにはいとしいひとがいるのに　あたしにはいないの
人家有郎同床睡，　よそにはいっしょにねむるいとしいひとがいるのに
小妹無郎抱胸膛。　あたしにはむねにだくいとしいひとがいないの

高山点豆豆葉稀，　どてのおさねをちょちょんのちょん　ぼぼはかわらけ
人家有妻我無妻；　よそにはつまがいるのに　おれにはいない
人家有妻同床睡，　よそにはいっしょにねむるつまがいるのに
小郎無妻抱双膝。　おれにはもろひざにだくつまがいない

(9) 劉兆吉編、前掲書所収の黄子堅の序文。

(10)『南開大学校史』二四四頁。

(11) 聞一多の四月三〇日付妻宛、昆明からの手紙、『聞一多書信選集』二八五頁。ところが、同じ聞一多が一九四〇年五月二六日付趙儷生宛手紙（『聞一多選集』第二巻七二八頁、四川文芸出版社、一九八七年）には、「道中、百余枚の風景画を描き」と記している。この一九四〇年五月二六日付手紙によって、劉烜『聞一多評伝』二〇四頁、季鎮淮「聞一多先生事略」（『聞一多研究資料』所収、四二頁）ともに、聞一多が道中描いたスケッチ百余枚としている。この他に『聞一多研究資料』所収の臧克家「聞一多先生伝略」六七頁、王玉清・李思楽「聞一多年譜」九七頁においても、聞一多がこのときに描いたスケッチは百余枚としている。

なお、一九九四年に湖北人民出版社より新たに『聞一多全集』（全十二巻、これまでに刊行されたものは全四巻）が刊行され、その第十一巻『美術』に初めてこの旅行中に描かれたスケッチが収録された。本書七頁にも、この旅行中に描かれたスケッチは百余枚、現存するものはわずかに三十六枚とあり、この三十六枚がすべて収録されている。本文中に用いた聞一多のスケッチは、すべて本書に収録されたものによる。

(12) 聞黎明『聞一多伝』一六二頁。

(13)『南開大学校史』二四三頁。

(14) 蔡孝敏「旧来行処好追尋――湘黔滇歩行雑憶」、前掲雑誌、一九頁。

(15)『聞一多書信選集』二八三頁。

(16) 本稿における大夏大学に関する記述はすべて、『抗戦時期内遷西南的高等院校』（貴州民族出版社、一九八八年）所収の張廷勲「大夏大学内遷記略」一四〇～一四三頁、王守文「抗戦時期的大夏大学」一四八、一五三頁、王先烈「大夏大学在赤水」一五六頁による。

(17) 聞黎明、前掲書、一六三頁。

(18) 陳登億「回憶聞一多師在湘黔滇路上」、『聞一多紀念文集』所収、二七九頁。

(19) 劉烜『聞一多評伝』二〇一頁。劉烜の原文は次の通りである――学生たちが貴州で通った経路は、多く三年前に紅軍が長征のときに通過した地方であった。山また山がつづく人煙まれな痩せた土地で、人々の気風は純朴であった。当地の人民はこのように多くの学生を見て新奇に思ったが、その後学生たちが穏和で買い物も公正にするので、学生たちに近づいてくるようになった。世間話のおり、人々はしょっちゅう壁の上にかすかに見える紅軍の標語を指さし、紅軍の伝奇小説風の物語や紅軍戦士が貧民のために食糧を放出してくれたり、人民にいかに関心を寄せてくれたかについて語った。国民党は朝から晩まで、共産党は土匪だ、いたるところで殺人放火をやり、共産共妻だ、とわめきたてていたが、このときとつぜん一般の人々の口から、かれら自身の見聞を聞いて、学生たちはみなたいへん新鮮に思い、聞一多も興味をもった。

(20) 埃徳加・斯諾〔エドガー・スノー〕『西行漫記』(董楽山訳、三聯書店、一九七九年)所収の「出版説明」、胡愈之「中文重訳本序」、埃徳加・斯諾「一九三八年中訳本〔上海復社版〕作者序」、およびエドガー・スノー『増補決定版 中国の赤い星』(松岡洋子訳、筑摩書房、一九七五年)四二一頁による。

(21) 聞家駟「憶一多兄」、『聞一多紀念文集』所収、三七四頁。本文は『聞一多研究資料』に再録されている。

(22) 聞一多「八年的回憶與感想」、『聞一多全集』第三巻己集一八〜二〇頁。

(23) 本稿第一四章五一頁参照。

(24) 本稿第一二章三六頁参照。

(25) 史靖『聞一多的道路』(生活書店、一九四七年七月)七一頁。

(26) 劉兆吉「聞一多先生二三事」、『新文学史料』一九七九年第四輯所収、一〇九頁。

(27) 王玉清、李思楽「聞一多年譜」、『聞一多研究資料』所収、九七頁。

(28) 史靖、前掲書、七一、七二頁。

(29) 「苗夷」は『抗戦中的西南聯合大学』所収の「長征日記」による。『清華大学史料選編』第三巻(下)所収の同文、一三一頁では「苗人」に訂正されている。

(30) 蔡孝敏「旧来行処好追尋――湘黔滇歩行雑憶」、前掲雑誌、一九頁。

(31) 鳥居龍蔵『中国の少数民族地帯をゆく』(朝日新聞社、一九八〇年)八二頁。
(32) 浦薛鳳『太虚空裏一遊塵――八年抗戦生涯随筆』(台湾商務印書館、一九七九年)八一頁。
(33) 蔡孝敏「旧来行処好追尋――湘黔滇歩行雑憶」、前掲雑誌、二〇頁。
(34) 本稿第三五章八六頁参照。
(35) 季鎮淮「聞一多先生事略」、『聞一多研究資料』所収、四一頁。
(36) 『聞一多全集』(第一巻)所収「年譜」六三頁。
その他に劉烜は『聞一多評伝』二〇一頁において以下のように記しているが、聞一多が学生たちにむかって話をしたときの状況が少し違う――県長は旅行団の教員を食事に招いたが、学生たちは腹をすかせたまま大堂に座っているより他なかった。聞一多はこうした状況を見て、自発的に大堂へ行き、学生たちと一緒に座った。夜半、学生たちのなかで口論が起こると、聞一多はゆっくりと立ち上がり高い声で、「わたしは今年もう四〇歳になったが、わたしも君たちと同じようにここにいる。今日のこの様は、誰かが故意にやったものなら、そのものは生きていくべきではない〔なんと恥知らずな〕」といった。かれの言葉に学生たちは静まり、ある学生は「さすが、文学をやった人だ」と誉め称えた。この夜、聞一多は食事もとらず眠りもしないでそのままずっと学生たちと一緒に座っていた。
(37) Hsu Kai-yu 許芥昱, *Wen I-to*, (Bston, 1980), p.138.
(38) 王康『聞一多伝』(湖北人民出版社、一九七九年)一八九頁。王康は前掲『聞一多的道路』の著者、史靖と同一人物。
(39) 季鎮淮「聞一多先生事略」、『聞一多研究資料』所収、四二頁。
(40) 劉兆吉「聞一多先生二三事」、前掲雑誌、一〇八頁。
(41) 蔡孝敏「旧来行処好追尋――湘黔滇歩行雑憶」、前掲雑誌、二〇頁。

〔本稿は松下国際財団一九九三年度(後期)研究助成による研究成果の一部である〕